

## 薩埵王子(さったおうじ\*1)

昔、印度に国王がいた。国王には三人の王子がいた。兄を摩河波羅といい、次を摩可提婆といい、末の王子を摩訶薩埵といった。王は山林に出て遊んでいた。王子たちもついて行った。大きな竹の林にくと、一匹の虎が七匹の子を生んだのをみた。虎は飢え疲れて痩せていた。遠からずして死ぬようである。兄の王子が言った。

「かわいそうに。この虎は子を生んで七日ほどになる。七匹の子がいて、食物を求めるのに暇がなく、飢えのあまりに子を食おうとしている」

末の薩埵王子は、

「この虎は何を食物とするのか」

と問うと、兄は、

「虎は生きた人間の肉を食物としている」

と答えた。二番目の王子は、

「それでは求めえないことだ。だれが身を捨てて、これを救うものがあるろう」

と言うと、兄もまた言った。

「もろもろの物の中で捨てがたいのは自分の命に過ぎるものがないのだから」

弟の王子は言った。

「われわれが身を守り惜んでいるのは、悟りに達していないからだ。賢い人は身を捨てて物の命を救うのである」

そう言って、心の内にひそかに思った。「この身は昔から幾代にもわたって生き代り、死に代りして、むなしく身を腐りはてさせるだけで、一つの悟りさえもえられないでいた。今はどうしてこの虎を救わないでいられようか。」三人の王子はこう言いながら、心に憐れみの心をおこし、虎をじっと見守っていた。

しばらくしてみな立ち去った。薩埵王子は帰りかけたものの、いちだんと深く憐れみの心をおこした。

「わたしの身を捨てるのは今である。人間の身は臭くきたない。いたわり守るほどのものではない。

この身のこわれやすいことは水の沫と同じだ。それなのにその身を保とうと恐れている気持は、敵をそばに迎えているのと同じである。人間の身は筋や骨がつながり、血や肉が集まっているだけだ。多くの悟りをえた人びとが深くにくみ嫌っているものだ。この身を捨てて、悟りと知恵で満たし、広く功德を施し、靈妙な仏の身になろう」と思い、二人の兄たちが妨害するのを恐れて、「お先に行ってください。わたしは後から参りますから」

と言った。兄たちは何とも気にしないで、先にその場から去って行った。

薩埵王子は走り帰り林の中に入って虎のもとに行った。衣を脱いで竹にかけ、

「わたしは仏法界のもろもろの衆生のために無上道の志を求めている。凡夫の愛する身を捨て、智者のねがいとする大慈悲を受けるがよい」

そう言って、虎の前に行き、身を任せて伏した。慈悲の力によったためなのか、虎は近寄って食おうとしない。そこでまた、「この虎は疲れて弱っているので、わたしを食えないでいるのだらう」と思い、



起ちあがり、枯れた竹を首に突きさし、血を出して虎の前に歩き近づくと、大地は震動した。風が波を巻きあげるような揺れ方であった。空の光りもかげり、あたり一面が暗くなった。空中より花が雨のように降って林の中に乱れ落ちた。飢えた虎は王子の頭の下から血が流れているのを見、血をなめなめ肉を食い、骨だけを食い残した。二人の兄が言うのに、

「大地が震動し、太陽も光をかくしてしまった。空一面に花が降りそそいでいる。これは弟が虎を憐れんで身を投げ捨てたからであろう」

と。驚いて走り来てみると、弟の衣は竹の上にかけてある。血は流れ、大地を潤している。髪は散りみだれ、骨だけが残り、あたりには香ばしい香が満ち満ちている。二人の王子は昏倒し、骨の上に転げ伏した。そして泣き悲しんで言った。

「弟は形もすぐれ、父母はとりわけ目をかけていたのに。何でいっしょに家を出ながら、この身だけが返らない身となってしまったのか。父母がお聞きになられたら、わたしたちはどうお答えすればいいのか」

と叫び泣いた。しばらくしてその場を去った。この事を王が知つたらと思うと、恐れはばかられて、王のもとには行けなかった。薩埵王子のお供の者たちに、

「王子はどこへ行ったのか、探して来い」

と言いつけた。

時に母后は宮城に留まって、高い楼の上で寝ておられた。そこで三つの夢をご覧になった。最初の夢は母后の二つの乳房が割けて血が流れ出た。次の夢は一本の歯が欠けて落ちた。三番目の夢は三匹の鳩のうち一匹の鳩を鷹が奪い去るものであった。とその時、大地の震動で夢からさめた。見ると二つの乳房から血が流れている。不思議に思っていると、仕えていた女が走って来て言った。

「お聞きになりませんか。みなとお別れして後、王子さまをお探しになっていることを。

まだ探し出せないのをごさいます。人ひとはそう申しております」

后は驚き迷って、玉のもとに行った。

「うちのみ子が見当りませんとー」

と申しあげた。王は驚きとともに涙を流し、もろもろの人を引き連れて林の中に入って行った。一人の大臣が、

「二人の王子は健在です。薩埵王子だけがお見えになりません」

と言う。王は泣きながら、

「なんという悲しいことよ。はじめ子がいる時は喜び楽しむことも少なかった。今子を失ってからは愁えや苦しみだけが重なりあうわい」

とおっしゃった。また大臣が来て、

「王子はもう身を捨ててしまわれました」

と申しあげた。王も后も心が迷い、涙を流し、輿に乗って行った。薩埵選王子の跡をみると、二人とも大地に倒れてしまった。顔に水を注ぐと、しばらくして声を出した。

「ああ、子供に先立っていたら、このような大きい悲しみには逢わなかつたらうに」

と言って身を震わせて泣いた。胸を押さえ地に転げ回することは、魚を陸に置いたようであった。王子の残した骨を拾い、卒塔婆の中に収めた。昔の薩埵王子は今の釈迦如来である。

この話は**最勝王経(\*2)**に記載されている。(天竺のことを註記した本である)

**西域記(\*3)**にこう言っている。「その所は土も草木も現在に至るまで赤い色をしている。血を塗ったような色である。人がその辺りに足を踏みこむと、胸さわぎがし、心がひるむことは、ちょうど荊にさされたようである。道理のわかった者、道理のわからない者でも悲しみ痛まないもの

はない」と言っている。

## 注

### \*1：摩訶薩埵

ブッダが前生まだ仏果をえていない時代の王子であった時の名。大車の子で、長兄が摩訶波羅、次兄を摩訶提婆、摩訶薩埵は三人兄弟の末子に仕立てている。

### \*2：最勝王経

金光明最勝王経。わが国では除災接の経典として、上代では広く信仰された。

### \*3：西域記

大唐西域記の略称。唐の玄奘三蔵が西域より天竺に至る百三十余国の仏教古蹟を探った旅行記。十二巻。

## 解説

あまりにも身施を主張するために作為的なうらみが残る。一身を提供するだけでなく、虎に食うけはいが見えないと、身を傷つけ血を出してまでして食欲をおびき出す、これは常識の域を越えていよう。今一つ不明な箇所もないではない。母の見た三つの夢のうち、一つの歯欠け落ちぬ、三つの鳩の一つ鷹に奪ひ取られぬばよいとしても、二つの乳房割けて血流れ出づにはどのような象徴があるのだろうか。

いちおう「子を扶養することができなくなる」と解釈してみたが。

## 敏翁後記

本文中に掲載した「捨身飼虎図」は、実物である。